元英国外交官チャ ルズ ル ガイ イ トン（4/6）

：

明:

哲学者/作家による真 の探求は、信仰と行 を 和させるための恒常的な葛藤に まされました。第4部：T.S.エリオットと、ガイの 女作。

目: 事新改宗者ムスリムの逸 著名人

より: ガイ イ トン

日15 Oct 2012

集日 15 Oct 2012

私は を去り、自分の思いを き留め、きちんと整理する必要性を感じました。私はベ ダンタ、道教、禅 教について き出しましたが、同 にそれらの教 に影 を受けた（マイヤ ズを含む）西洋作家についても きました。当 、出版社の社 で、偶然出会った 人のT.S.エリオットによって、それらのエッセイはソロ の作品からの引用文に因み、「The Richest Vein（最も かな 持ち）」という 名で出版されました。丁度当 、私にとっての きとなる人物と出会っていました。その人物とは、シェイフ アブドル＝ワヒ ドとして、その人生の大半をカイロで ごした、フランス人男性のルネ ゲノンでした。

ゲノンはその妥 なき知的 正さから、 代人、つまり西洋人または西洋化された人々によって当然のこととして受け止められていることをことごとく破 しました。いわゆる「ルネッサンス」以降のヨ ロッパ文明の向かう先は、他の多くの人々によっても批判されてきましたが、 一人として彼ほどまでに急 的で度重なる 烈な批判を、西洋文化が 史の先端にあてがった原理や に して行った者はいないでしょう。彼のテ マは「原始的 」または永 の哲学と呼ばれるもので、それは世界宗教の根源として、古代神 、そして形而上学的教 の双方により明示 保持されているものです。こうした の言 は象 言 であり、彼によるその解 は、他の追 を しませんでした。さらに、彼は人 の を逆さまにし、近代

以前においては普遍的であった信条と取って えたのです。つまり、人 の精神性は　の　と共に衰退するというものであり、我々は以前の 文化が拒 したすべての　が　し、量が を凌し、退 がそのピ クに するとされる、 末前の暗　代にあるのです。彼の著作を み、それを理解した人は、二度と元の自分に ることはないでしょう。

ゲノンを むことによって人生 の わった他の人々のように、私も20世 の世界において 邦人となっていました。彼は最　示であり、以前の　示の 括であるイスラ ムへの 信から、自らの 理を突き んでいました。私はまだそれに する心の　が出来ていませんでしたが、やがて自分の意 を押し すこと、または最低限でも覆いをかぶせることを学びました。自分の周 の人々との恒常的な　の状 で生活することは にとっても幸福なものではありません。また、彼らとの 争は、同じ基 を共有していないため不可能なのです。 争や　は、それに　する人々が、ある一定の共通点を持つことを前提とします。共通点が存在しなければ、混乱や 解、または 突を避けることは出来ないでしょう。 代文化の根本である信条は、人々によるその情 的な追 においては、サルマ ン ルシュディの著作「 魔の 」 乱で明るみに出たような盲目的な宗教信仰と大差はないのです。

私は 々、 益な　に加わらないという 意をうっかり忘れてしまうことがあります。数年前、トリニダ ドの外交 餐会に招待されたとき、私のとなりの若い女性が、正面に座る英国人牧 と会 していました。彼女が人 の　について信じるべきかどうか分からない、と言うまで、私は半分しか会 に参加していませんでしたが、牧 の答えが非常に 礼かつ侮辱的だったので、私は抑えきれずこう言いました。「彼女の言い分は至 正しい。　などというものはない！」彼は激昂から歪んだ で私の方を向き、こう言いました。「もし今夜、私が自 しようと思ったのであれば！」自 はキリスト教徒とムスリムの双方にとって大罪であることから、「より良き未来」に向い　中の信仰が、地上における　への 望によって、神と来世への信仰に取って わられたことをその 初めて 付いたのです。反逆的司祭のテイヤ ル ド シャルダンの著作において、キリスト教はそれ自体が　の宗教に 小してしまいました。この信仰を近代西洋人から い取ってしまえば、彼らは指 を失い、荒野をさまようこととなるのです。

「The Rickest
Vein」が出版される 、 友から仕事を 介されたため、私は英国からジャマイカに移り住んでいました。私の著作のカバ での触れ みは「成熟した思想家」というものでした。「成熟」という形容 は、一人の人 としても、その人柄としても、私に してはどう考えても不 切なものでした。私は青年になったばかりで、ジャマイカは青年期の幻想を す るのにぴったりな 所だったのです。 直 の西インド （カリブ ）での暮らしを した者だけが、そこの提供した「 」と性的アドベンチャ を求める者たちにとっての喜びと魅力のだったことが理解できるでしょう。マイヤ ズ同 、私には 度を与えてくれるような 理 が欠落していました。私の著 を んで手 を送ってくれた人々の中には、私のことを「白くい髭を蓄えた」「英知と人情に溢れた」老人であると思い んでいるものもあり、自分を ずかしく思いました。私は直ちに彼らを幻想から目 めさせ、彼らが私に している重荷から 放されたいと いました。ある日、カトリックの牧 が を れ、彼の友人にガイ イ トンという著者による「非常に 味深い本」を んでいることを告げました。彼は、その著者が にジャマイカにいることを知ると 愕し、どうすれば彼と会えるかと ねました。彼の友人たちは、私が来るであろうとされたパ ティ に彼を れていきました。彼は私へ 介され、目の前にいる愚かな若者を一瞥すると、 きのあまり首を振って静かにこう言ったのです。「あなたがあの本を いたなんてあり得ないことだ！」

この 事のウェブアドレス:

https://www.islamreligion.com/index.php/jp/articles/162

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。